

日本オペレーションズ・リサーチ学会 学会誌の発刊に当って

オペレーションズ・リサーチも一つの科学である。行動決定の科学ともいわれる。しかし従来の科学と非常に異なる点は、個々の物体とか、個々の事象についての研究よりもむしろ体系全体、組織全体の関係に注目することである。複雑な社会現象、人間関係、生産過程、等の中に何らかの規則性を見つけようとする。そしてこれを管理する。何らかの行動決定に関係する事項を取扱うという点に一つの特徴をもつ。

科学や技術はその進歩発達に伴って特殊な専門に分化した。この傾向は20世紀前半において特に顕著である。高度に発達した学問の最先端に到達するためにはある程度の専門化は止むをえないが、その結果としての孤立化は学問自身のためにも決して好ましい現象ではない。この故に科学や技術の多くの専門分野の共通の領域の開発が提唱されるに至った。科学と工学、工学と経済学との距離は近年ますます遠ざかる傾向が認められる。この間隙を埋め、そこに新しい領域を見出して行く新しい科学の誕生こそわれわれが望んでいたものである。

オペレーションズ・リサーチは元来このような空間に発生した新しい学問である。この学問は科学と技術、技術と経営の相互依存の関係を深め、あわせてそれぞれ専門の分野の発達にも寄与せんとするものである。すなわちそれは一つの境界領域の科学として発展したものであり、しかも組織的活動をするに際しての行動決定の科学的基礎を提供するという意味で、実践とは常に表裏の関係にある。オペレーションズ・リサーチはそのような一貫した考え方を基調として、極度に専門化された科学や技術より得られる諸成果を一つの目的に対して最も効果的に利用するための方法を決定する学問である。この故にオペレーションズ・リサーチは単に戦争における用兵の術に止らず、広く官民の経営、企業また学問研究の全般にわたって利用されるべき性質のものであるといえることができる。

日本のオペレーションズ・リサーチ学会は各方面の異った分野の専門家や研究者、あるいは官民の各種の団体や企業体に所属する実際家に対して研究発表や情報交換の共通の場を提供すると共に海外研究団体との連絡のためのわが国の代表機関として、1957年4月およそ200名の発起人によつて準備され、同年6月に設立を見た。オペレーションズ・リサーチは実践の上のみ成立ちうるものであって、単なる象牙の塔式の研究態度は無意味に近い。協同研究はオペレーションズ・リサーチ本来の研究態勢であった。この学会はそのような協同研究、話合いの研究の場が作られるために役立つ学会、直接実施者と研究者が手をつなぐ場を提供する機関でなければならない。

本学会の邦文機関誌であるこの会誌はその設立に当り有力な母胎となった経営科学協会の機関

誌「経営科学」の題名を引継ぐことにして、ここに第1号を公刊する運びとなった。

本誌はオペレーションズ・リサーチに関する研究の邦文の機関誌として研究者および実際家のための発表の場とすると同時に広く各方面のORワーカーに対して最新の知識並びに情報を速かに報告してゆきたい。現場のオペレーションズ・リサーチの仕事は、オペレーションズ・リサーチの本質であり、原動力である。しかし従来ともすれば学問という既成の範疇からは除外されようとしてきた。本誌がこういった仕事に正当な地位と権威とを与えるための機会として役立ち、また同時にオペレーションズ・リサーチの理論研究の発展に貢献するものであることを望みたい。

1957年9月10日